

日時：平成26年6月6日（金）18：30～21：00

会場：練馬区役所 本庁舎19階 1903会議室

## 1. 事務局長挨拶

第3次活動計画推進の25年度が終了したので、主な取り組みについての報告と第4次活動計画について小地域福祉活動の今後の展開について提案をするので、委員の皆様の見解をいただきたい。

## 2. 配布資料確認

## 3. 第3次地域福祉活動計画 平成25年度進捗状況報告

### 資料1・2をもとに説明

平成25年度に各部署が重点事業として取り組んだ内容（太文字・網掛け部分）を中心に報告

### 【質問・意見交換】

#### 《小地域福祉活動 おせっかいなまち・光が丘について》

職員：資料1に記載の「おせっかいなまち光が丘」については、委員にお渡しした冊子の他に本件が掲載された東京都社会福祉協議会の福祉広報のコピーをお配りしている。裏面に「社協の地域福祉コーディネーターの存在が大きい」と言っていた記載がある。「豊玉ふらっと市によろこそ」裏面にも、地域福祉コーディネーターの紹介をいただき、地域福祉コーディネーターの活動が3年目になり、広報誌等で取り上げられるようになったことを報告したい。

委員：「おせっかいなまち・光が丘」の、発行部数と配布数を教えて欲しい。

職員：光が丘全世帯を対象とし、15,000部作成し13,500世帯に配布した。

委員：成果として、事業進捗状況（資料1）に冊子の名称や具体的な数値を記載した方がいい。

委員：東京都社会福祉協議会で「福祉広報」記事において、「おせっかいなまち・光が丘」冊子作成のプロセスを紹介した。自治会単位で一戸ごとに住民が手で配ったということで手がこんでいる取り組みである。孤立死という問題の中で、顔が見える関係を作っていきたいという住民の思いを社協の地域福祉コーディネーターがつかないでくれたのが大きい。「おせっかい」という言葉も「見守り」という言葉ではなくお互いが気づきあう言葉を探したいという思いの中、地域福祉コーディネーターが黒子のように関わっているからできた。配布したことが到達点ではなく、活動のためのツールということが大きな特徴である。

委員：「おせっかいなまち・光が丘」は具体的には、どのような使い方をしているのか

職員：一度に内容を全部見るという使い方ではないと考えている。一章は自分のことを考えるもの。切り出して利用する。災害に関連する内容は防災部、気づきのポイントについては老人クラブ等が中心であったり、それが「気づきのバトンをつなぎましょう」という内容につながっている。また、民生児童委員や自治会主体の集まりでは内容は様々なので、全体をくまなく見るのではなく一部をフォーカスして見ていただき、内容を掘り下げている。

委員：おせっかいは、どこからの視点なのか？

職員：内容は見守りだが、見守りという言葉でなく違う言葉にしたいという気持ちから「気づき」「おせっかい」という言葉が出てきた。「おせっかい」は辞書で引くと「いらぬ世話をやくこと」とある。様々な議論のなかで、光が丘という「おせっかい」の視点となった。

委員：時代の変化とともにおせっかいが必要になってきた。昔で言えば、仲人がおせっかいな人であった。現在、町会加入率は4割。ある意味では、町会は毛細血管の役割をしていると思っ

ているが、その機能を若い人はわかっていない。一人では生きられないため、おせっかいを求めるようになった変化がある。

委員長：光が丘はそのことに気づいて、「おせっかい」をしようとなった。例えば、3. 1 1 などあると、一人で生きられないと再認識するきっかけとなったが、こういう実績を作っていないと風化していってしまう。

委員：孤独死など、目に見えない問題も起きている。だからおせっかいが必要ということになる。

#### 4. 第4次地域福祉活動計画の策定に向けて

##### 資料3・4・5をもとに説明

##### 【質問・意見交換】

##### 《第4次評価方法の提案について 資料5》

委員長：資料5の評価の④「小中高生向けの福祉学習における感想」は、小地域福祉活動のAが「該当せず」になっているが、資料2裏面の小地域福祉活動に④が記載されているのはなぜか。

職員：評価方法は「人材育成の充実」として設定して行ったが、人材育成と小地域はつながっていて小地域の評価につながるものがあつたため記載した。

委員長：資料5の④は「該当せず」ではなく、△とか○ではないか。

職員：ご意見の通りなので、○に訂正させていただきたい。

職員：当事者によって案件は違う。要素が錯綜するので点数化、評価することは困難なことである。

委員長：地域福祉コーディネーターの増員を求めている時であるので、第三次地域福祉活動計画では地域福祉コーディネーターの設置に効果があつたということを示していかなければならないので悩ましい。様々な切り口からその効果を証明するためには、数値化できるところは数値化する必要がある。人材の配置については、良かった、効果があつたこと、人の増員は難しいので、人の評価を集めて数値化できるものはする。評価も含めて第3次計画で活動したことを評価し、第4次活動計画につなげていく。評価の方法について、今後議論をさらに進める必要がある。

委員：田舎で育つた人間は、人との関係に自然なルールがあつた。表にしなくてもわかる。予算をかけて評価していくことになるので、無尽蔵にはできないこともわかる。

##### 《小地域福祉活動の今後の展開について 資料4》

委員長：「おせっかいなまち・光が丘」を作つた母体は、編集委員会となっている。このグループがこれを検証していく母体となって3年目以降にいけるのか？もしできていないとしたら隣の地区に行くのはまだ早い。そのことを伺いたい。

副所長：編集委員会は、住民で9名。まとまって活動をしているのではなく、各自住まいの場に散らばつて活動を始めている。それぞれが住まいの場で小冊子の母体となっていると言えると思う。

委員長：イメージとしては、地区社協ができていくのか、まだ手をかけていく必要があるのかが分かれ目である。

職員：小冊子ができて見守り連絡会という懇談会ができた。その懇談会が地区社協のようになっていけばと思っている。

委員長：見極めは、あと1年でできそうなのか、できそうにない場合は地域福祉コーディネーターが手を引くとすぐ壊れる。

職員：担当している地域福祉コーディネーターは手を引くのはまだ早いと思っているが、間接的に見ると波及効果で他の地域にも広がっており、大分熟している。

事務局長：社協は、民生児童委員や地域の人とつながっている。モデル地区にはボランティア・地域福祉推進コーナーがあり、社協の職員が常駐している拠点でもある。普段からつながっているので関係は続けていくことができる。隣の町会自治会でも関心も強くなっている。光が丘のことが

新聞で取り上げられて起爆剤となり広がりつつある。隣町で土支田という地域があり土地建物の寄付を受け、そこを地域の拠点にできないかと検討しており、足がかりとなっていくのではないか。

委員：町会で「童謡を歌う会」を行っているが、町会等のメンバーとも構成員が異なり集まる人の顔ぶれが違う。他の地域からも集まり40～50人となっている。ボランティアでピアノを弾いてくださる方がいる。

事務局長：いろいろな機会に顔を出すと接点が広がる。よりスピードを持って話が伝わっていくという期待が寄せられる。

委員長：見守りのために集まった人が見守りを行うのはあたり前である。童謡を歌う会の人たちが何かの触媒で違う活動を始めるとつながる。きっかけになると爆発的に増える。

委員：新しいことを手探りで試行錯誤していくのは大変である。

委員：「おせっかいなまち・光が丘」の編纂以外にもいろいろな取り組みをしている。それがどのように地区社協のようになっていくかは、光が丘地区ではすでにある組織がうまく動きながらになると思う。豊玉地区も懇談会などを定期的に行っており、両地区に何らかの組織を作っていくという動きがみられる。

委員：光が丘31年目 高齢化率30%を超えている地区はいくつかある。啓蒙して自助努力的なものをしていかないと危惧している。引友（引退した友達同士）とのつきあいや、商店会とのつきあいはある。逆に商店（理髪店）等から情報をもたらることが多々ある。小学校でのランチパーティーや風呂場の付き合いで出会った同士が、老人クラブを立ち上げ20位のサークル活動ができた。今求めているのはつながりである。

委員長：光が丘は10年～15年先の社会と同じ状況になっていて待たなしの状況である。その中でも気づいている人は活動につながっている。気づいてない人は地域福祉コーディネーターが丁寧に拾ってつないでいっている。だからといって違う地域に行ってしまうのはうまくいかない。今後、難しいかじ取りをしていかなければならない。

委員：光が丘の自治会はどのくらいの人数か。自分の地域では、同じ時期に入居した者同士10戸程度で組織的に登録しているわけではないが、つながっている。仕組みとして作られれば、いざという時の対策ができる。人数が多すぎるとできないと思う。

委員：小学校が8校あったのが4校になった。避難拠点になっているところは、数か月に1回炊き出しなど行いつながりを作っている。役職員が回ってくるのを避けるため町会に入らない人もおり、組織率は80%であるが、誰かとつながりたいという思いで老人クラブなどには入会している人も多い。光が丘は、団地名がついた自治会が多く、高島平の反省から都市計画的に賃貸・分譲・都営など凸凹して建築されており都市計画のもとで融合している。

委員長：5世帯3世帯の自治会もあれば、2,000世帯3,000世帯で1つの自治会もある。自治体の考え方や歴史的な経緯で自治会の単位は違っている。最初に声かけしてくれる人がいれば仕組みが動いていくが、意図的に関わりがない地域では、地域福祉コーディネーターが声かけしていくことでまとまっていく。現在は、声掛けする人がいないが、声掛けするところを作る仕組みが生まれれば強化していくことができる。さきほど委員のお話であった田舎では自然にできていたことを、災害等で追い詰められて意図的に作らざるをえなくなったので、地域福祉コーディネーターの活動が必要となっている。

委員：人数が少なければ親密感が生まれるので、末端のグループは小さい方がいいと思う、顔の見える人数がいい。

委員長：大きな自治会では、班を作って顔の見える関係を作っている。

委員：地域福祉コーディネーターとして、光が丘都営団地の1,800世帯、11棟ある自治会に自治会活動支援で入っていた。この自治会にある4つの防災部それぞれと関わりを持つようになると、

より顔の見える関係ができてきた。最終的には、いざというときには棟単位、さらにはフロアという話になった。

委員：民生委員は、各号棟毎で動こうとなっている。もしもの場合に立ち入ることの確認書をもっている。

委員長：全体としては、この方向性で進めていって良いかの確認をいただけるか。議論として足りないか。概ねよろしいか？

出席委員：同意（了承をいただく）

委員：第4次計画では3次計画を踏襲していくと考えればいいのか、重点事業が、小地域と人材育成の2つではなくなるのか。

職員：第3次計画では小地域と人材育成に2つに分けて掲げたが、推進していきながら小地域と人材育成は分けられるものではないと気づいたので、第4次計画では小地域福祉活動の推進を手法として行いたいと思示した。人材育成が基本にあり小地域となる。第4次計画では、全事業を網羅していくのではなく、2つの視点にフォーカスして取り組んでいきたいと考えている。

## 5. 報告会について

### 資料6をもとに説明

#### 【質問・意見交換】

副委員長：報告会では社協の取り組みの周知を図るとあるが、来場の対象はどのような人とするのか。一般の人が来るか不安である。人が来たいという企画を考えないといけないのではないか。このままでは人が呼べず企画倒れになるのではないかと思う。

委員長：この報告会をどのような位置づけで実施するのか。①区民が多く来る仕掛けにするのか。②地域で主力になっている人たちが推進母体になるようなスタートラインにする仕掛けをするのかの二つの方法が考えられる。豊玉地域と光が丘地域の実践報告を受けて、自分の地域ではどのように展開していけばいいのかを学ぶ機会とするかなど、各テーブルで同じ地域の人たちが、自分たちでスタートするためにはどんな方法があるのかという話し合いにする。コアの人に呼びかける、意味づけをつけないとただ「やりました」では意味がない。何を目的にしてどのような位置づけにするのが大事である。

職員：資料4「小地域福祉活動の今後の展開について」を行うためには、8月に報告会を実施し今年度から仕掛けなければいけない。関町や大泉など他地区のコアになる方々に伝えていきたい。その地域が応用できるような機会になればいいと考え、8月に実施することとした。

委員長：話し合いを行い、推進母体になる人たちが参加できるような設定をしないといけない。区に地域福祉コーディネーターの増員を要求するには、この時期（8月）という意味もある。

委員：住民リーダーになる人はどういう人か。福祉の活動をしている人か。

職員：実際に活動している人の中でリーダー的な人で、広い意味での福祉の活動をされている方と考える。

委員：社協が声をかけて、来そうな人を獲得しないといけない。

委員：将来、面的に広がるラインはどこか考えていかなければならない。

委員長：いろいろな人がいていいが、推進していく力を持っている人を集めないと意味がない。一本釣りでも推進していく力を持っている人を集める必要がある。

副委員長：社協の活動報告会は身内的である。区の地域福祉計画との関連で区の人に入ってもらうような広がりを持つような考えはどうか。

委員：区の人には来てもらいたい。

委員長：区職員としてはどう考えているか。

委員：どういう所に焦点をあてて声をかけたらいいか。

- 区職員：青少年委員会とか町会自治会とか、PTA等に声をかけている。
- 職員：区職員にもパネリストとしてご参加をお願いします。
- 委員長：パネリストを一人増やすということか。第3次計画の報告会なのか第4次計画に向けてなのか、名称を考えたほうがいい。第4次で考えていることを投げかければ行ってみようとなるかもしれないが、報告だけだと難しいのではないか。基調報告をする人は必要か。
- 職員：報告会にしないといけないのか。
- 職員：基調報告というより、パネリスト4人が活動していることを伝えたい。社協が行っていることを伝えたい。
- 職員：第3次計画の報告会という位置づけより、第4次地域福祉活動計画に向かっていく内容が聞きたい。
- 職員：国の動きなど、関心を持てるテーマがいい。介護保険のように地域の役割が大きくなってきている。全国的なものも含めて問題提起していく会にしてはどうか。関心を持つ人もいる。
- 職員：この内容では一般向けというより、行政の説明会の印象である。背景的なことを含めて話していただくのは委員長にお願いする方がいいと思う。
- 職員：地域福祉コーディネーターが成果を出したので、具体的にどうであったのか皆は知りたいのではないか。取り組みの実例の部分と総論的なことを教えていただくのが良い。「ひとりの不幸も見逃さない」の冠をタイトルにつけるのであれば、高齢者の課題に結びつきやすいと思う。こどもの虐待の発見も問題となっているので、様々な人たち（みんな）が入る部分の説明を入れて欲しい。社協はすべての人に向かって対応している、がんばっていることが出てくる方がいい。
- 職員：実例を話すために住民リーダーに登壇してもらおう。委員のオーダーには合っていると思う。
- 職員：住民リーダーの発言だけだと片方だけであるので、地域福祉コーディネーターの発言もあった方がいい。地域福祉コーディネーターがつながりを支援してきて、その活動が住民活動の活性化につながったと思うのでその関わり等も知りたい。
- 事務局長：第3次計画の取り組みを確認して小地域活動をメインに第4次計画につなげていき伝えたい。最初はそのようなイメージで住民リーダーに、住民側からみてどうであったかを話してもらおうと思っていた。コアな人材を集めて、応援していただく。小地域福祉活動で地域福祉コーディネーターが実践しながら地域の中で根付いていく、地域の中でつながってきているという話になればいいと考えた。
- 副委員長：今のような話し合いをして報告会のイメージが作ればいい。
- 委員長：目的・趣旨にそれぞれ考えの相違があるため、どうするか？
- 職員：「目的」の文面で周知を図り、さらに「第4次計画推進のための一助とする」としたらどうか。
- 委員長：グループディスカッションをやめて、住民側と地域福祉コーディネーターがそれぞれ登壇して時間をとることもできるが、第4次地域福祉活動計画のエンジンにつながっていくかどうか。参加者が集まって自分たちも同じような取り組みをしたいと考えるか。
- 職員：グループで地域に分かれるとだいたいすでに地域で活動している方々が集まり、他の会議などと同じ顔触れになってしまうことが予想されるため、グループディスカッションでなかなか新しい展開にならない。参加者が自分の活動の紹介をして終わってしまう可能性がある。グループディスカッションを変更した方がいい。
- 委員長：40分を潰して2地区からの発言だけと物足りない感がある。良いアイデアは出ていないが、事務局に預けていいか？
- 職員：この報告会では地域が危機感を持っていることに対して、話していけたらいいと考えていた。
- 職員：危機感をPRすることは良いと思うが、最初の危機感が共有されていないので、共有するための材料として最初の報告が必要と考える。

委員：前言の意見に賛成である。

職員：危機感があって、地域福祉コーディネーターに相談が集まってきているのではないかと感じている。

副委員長：両方あっていいと思う。

委員長：社会保障制度等の改革の話から地域でつながることが大切との話につなげて50分ぐらいの基調講演をして、その後、2地区の住民リーダーとコーディネーターの両面から報告を行い、副委員長からコメント 委員に東京都の政策動向、区職員に行政での地区の取り組みをお話いただき、グループワークはなしにする。参加者は、地域で活動している団体や区民で関心のある人に声をかけ、策定・推進評価委員からも声をかけてもらう。

## 6. 次回の日程について

【日時】平成26年9月3日（水） 18時30分から

【場所】未定

以 上